

[短 報]

## 保険調剤薬局の薬剤師に対する 医療用麻薬講習会の開催と服薬指導業務に着目した評価

宮永 圭<sup>\*1,\*2</sup> 橋詰 淳哉<sup>\*1</sup> 龍 恵美<sup>\*1,\*2</sup> 能勢 誠一<sup>\*1</sup>  
 長谷川京子<sup>\*1</sup> 江崎のぞみ<sup>\*1</sup> 河内 佑樹<sup>\*1</sup> 岸川 礼子<sup>\*1</sup>  
 中村 忠博<sup>\*1</sup> 兒玉 幸修<sup>\*1</sup>

\*1 長崎大学病院薬剤部

\*2 長崎大学病院緩和ケアセンター

(2022年4月1日受理)

**[要旨]** 保険薬局薬剤師を対象に、医療用麻薬に関する講習会を座学に加えてロールプレイや small group discussion を併用して実施し、受講前後で服薬指導業務に変化がみられるかどうかを調査した。講習会の実施後は、医療用麻薬の鎮痛効果および副作用の確認を実施した割合が上昇し、ベースの鎮痛薬の使用方法に関する患者指導を実施した割合も上昇した。座学に加えロールプレイ等を併用した今回の講習会は、保険薬局薬剤師の行動変容に繋がることが示唆された。

キーワード：医療用麻薬講習会、保険薬局、服薬指導

### 緒 言

地域医療におけるがん疼痛管理をより良いものにするために、保険薬局薬剤師を対象として多くの医療用麻薬に関する講習会が実施され、緩和ケアや医療用麻薬に対する基礎的知識および服薬指導技術の向上が報告されている<sup>1-3)</sup>が、これらの報告における服薬指導技術の評価方法は自己評価によるものであり、講習会後の服薬指導業務における変化については示されておらず、医療用麻薬の講習会前後で、服薬指導の内容を比較した報告は、検索する限り見当たらなかった。

そこで我々は、近隣の保険薬局の薬剤師を対象に医療用麻薬の講習会を実施し、講習会の前後でアンケート調査を行い、医療用麻薬交付時の服薬指導業務における変化について評価を行った。

### 方 法

我々の講習会は、教育効果を高めるために、医師に対する教育効果がすでに示されている<sup>4)</sup>、Palliative Emphasis program on symptom management and Assessment for Continuous medical Education (以下、PEACE) を参考にした。PEACE プログラムの中に、3人1グループで行うロールプレイがある。1回目の講習会では、疼痛アセスメントおよび医療用麻薬の種類や使い分けに関する講義を

行ったのちに、医療用麻薬をはじめて開始する模擬患者が院外処方箋を持参した想定で、3人1グループでのロールプレイを実施した。また、動画による教育効果が過去に示されている<sup>5)</sup>ことから、ロールプレイに先立ち、ファシリテーター2名による保険薬局窓口における初回面談のデモンストレーション映像の視聴を行った。2回目の講習会では、オピオイドスイッチングをテーマに講義と症例検討を行った。症例検討では、単純な医療用麻薬の換算にとどまらないよう、疑義照会すべき内容が含まれる症例を提示した。3回目の講習会では、医療用麻薬の副作用についての症例検討を行った。2～3回目の講習会では、講義に加え、飯原ら<sup>6)</sup>や佐藤ら<sup>7)</sup>によって、優れた教育効果があることが報告されている small group discussion (以下、SGD) 形式での症例検討を実施した。

#### 1. 調査対象

長崎大学病院 (以下、当院) 薬剤部との定期的な情報交換の場に参加している近隣薬局に勤務し、講習会を受講した薬剤師を対象とした。

#### 2. 講習会の実施体制と内容

2019年9月～11月の3カ月間に、毎月1回90分の医療用麻薬に関する講習会を開催した。講師は当院の緩和薬物療法認定薬剤師2名が担当し、1回の講習会につき3名のファシリテーターが参加した。ファシリテーターは、3つの小グループに分かれて行うロールプレイや症例検討のファシリテーションのために、各グループに1名配置し、緩和薬物療法認定薬剤師取得を目指す当院の薬剤師が担当した。講習会は最初にハンドアウトを配布したうえで講義

形式の座学を行い、次に事例検討を実施した。講習会の内容は、事前に内容に関する要望を募った結果、ベースやレスキューの使用法や当院での確認・指導内容に関する希望があったため、以下のような内容とした。

#### 1 回目：

緩和ケア総論（座学）：医療用麻薬の基礎知識、種類と使い分け、退薬症候の初期症状と対処方法

初回面談のデモンストレーション映像視聴

医療用麻薬の初回導入ロールプレイ

#### 2 回目：

医療用麻薬の鎮痛効果に関する聴き取りのコツ（座学）

オピオイドスイッチングのロールプレイ

#### 3 回目：

医療用麻薬の副作用対策（座学）

模擬症例に対する症例検討

### 3. 調査項目

医療用麻薬交付時の服薬指導に関するアンケート

講習会前後での服薬指導業務における変化を確認するために、講習会に3カ月を通じて参加した6名についてアンケート結果の前後比較を行った。講習会受講前の2019年8月と受講後の2019年12月にアンケート調査を実施した。

### 4. 統計解析

医療用麻薬交付時の服薬指導に関するアンケートでは、Fisherの正確確率検定を用いて比較した。有意水準は5%未満に設定した。統計解析には、JMP<sup>®</sup>16（SAS Institute Inc., Cary, NC, USA）を用いた。

### 5. 倫理的配慮

本アンケートは「医療・介護関係事業者における個人情報の適切な取扱いのためのガイダンス」に準拠し、当院臨床研究倫理委員会の審査対象外であることを確認して行った。また、アンケート調査を実施した際、アンケート用紙に調査結果の関連学会や学会誌での報告を計画していること、個人情報を開示されないこと、アンケートの提出は任意であることを説明した。

## 結 果

### 1. アンケート対象者

講習会の受講者は第1回目が8名、2回目が7名、3回目が6名であった。結果の評価は、連続して3回参加した6名で行った。

### 2. 医療用麻薬交付時の服薬指導に関するアンケート

本講習会を受講した保険薬局における医療用麻薬調剤件数は、8月が31件、12月が29件であった（表1）。

医療用麻薬交付時の確認内容に関しては、ベースおよびレスキュー鎮痛薬のアドヒアランスを確認した件数については大きな違いはみられなかったものの、疼痛の状況を確認した件数については、医療用麻薬調剤件数に占める確認件数の割合が14件/31件（45.2%）から21件/29件（72.4%）に有意に上昇していた（ $p = 0.040$ ）。同様に悪心、眠気の発現状況を確認した割合も、それぞれ2件/31件（6.5%）から11件/29件（37.9%）（ $p = 0.040$ ）、3件/31件（9.7%）から11件/29件（37.9%）（ $p = 0.014$ ）と有意な上昇が認められた。便秘に関しては、8件/31件（25.8%）から12件/29件（41.4%）と上昇はしたものの有意差は認めなかった（ $p = 0.275$ ）（表1）。

医療用麻薬交付時の指導内容に関しては、ベース鎮痛薬の使用法について、受講前9件/31件（29.0%）、受講後12件/29件（41.4%）と上昇したと有意差は認めなかった。その他の項目については、大きな変化はなかった（表1）。

医療用麻薬交付時の疑義照会に関しては、受講前は0件であった。受講後は、処方医に対して、ベース鎮痛薬の用法確認およびその他の確認が1件であった（表1）。

## 考 察

医療用麻薬交付時の服薬指導に関するアンケートの結果、疼痛や副作用の発現状況を確認した割合が、本講習会の受講後に有意に上昇した。一方で、医療用麻薬交付時の指導内容や疑義照会の実施状況については有意差を認めなかった。

隅田ら<sup>3)</sup>は、医療用麻薬に関するグループワークを実施した結果、痛みの聴取や副作用の説明に対する自己評価が有意に上昇したことを報告しており、我々が実施したアンケート調査の結果と類似している。ただし、自己評価ではなく確認した件数を調査した点において異なっており、我々の結果は講習会後に服薬指導業務が変化したことを示す貴重な結果であると考えられる。今回の結果が得られた要因としては、講習会を座学のみで行うのではなく、すでに有用性が知られているPEACEプログラム、デモンストレーション映像の視聴、SGDの要素を取り入れたことが一因であると考えている。一方、指導内容に関しては、ベース鎮痛薬の使用法の項目で上昇がみられていたが、有意差までは認めなかった。副作用の対処方法に関する指導についても変化がみられなかった。しかしながら、副作用の確認割合は上昇していることから、確認は行ったものの、指導を要するような状況が認められなかった可能性があると考えられる。今回の調査で、有意差は認めなかったものの指導件数の割合が上昇していた項目に、便秘の発現状況の確認件数とベース鎮痛薬の使用法に関する項目があった。これらの項目をより正確に評価するためには、対象者や調査期間を増やす必要がある。 $\alpha$ エラー0.05、検出力0.8とした場合、それぞれ280件と461件の調剤件数が必要であり、今回の調査では調剤件数が不足していると考えられる。今後、調査対象となる保険薬局を増やし、600件程度

表1 医療用麻薬交付時の服薬指導に関するアンケートの結果

医療用麻薬の調剤件数	講習会受講前		講習会受講後		
患者数 (人)	23		20		
調剤件数 (件)	31		29		

  

確認内容の項目	調剤件数に占める確認件数の数 (件数) および割合 (%)				
	講習会受講前		講習会受講後		p 値
	件数	割合	件数	割合	
ベース鎮痛薬のアドヒアランス (残薬含む)	7	22.6	5	17.2	0.750
レスキュー鎮痛薬のアドヒアランス (残薬含む)	8	25.8	7	24.1	1.000
疼痛の状況	14	45.2	21	72.4	0.040
便秘発現の状況	8	25.8	12	41.4	0.275
悪心発現の状況	2	6.5	11	37.9	0.004
眠気発現の状況	3	9.7	11	37.9	0.014
その他の確認事項	6	19.4	2	6.9	0.257

  

指導内容の項目	調剤件数に占める指導件数の数 (件数) および割合 (%)				
	講習会受講前		講習会受講後		p 値
	件数	割合	件数	割合	
ベース鎮痛薬の使用法	9	29.0	12	41.4	0.418
レスキュー鎮痛薬の使用法	9	29.0	6	20.7	0.556
便秘発現時の対応方法	2	6.5	2	6.9	1.000
悪心発現時の対応方法	2	6.5	0	0.0	0.492
眠気発現時の対応方法	1	3.2	0	0.0	1.000
その他の指導事項	3	9.7	2	6.9	1.000

  

疑義照会の項目	調剤件数に占める疑義照会の数 (件数) および割合 (%)				
	講習会受講前		講習会受講後		p 値
	件数	割合	件数	割合	
処方箋記載不備	0	0.0	0	0.0	—
投与日数確認	0	0.0	0	0.0	—
ベース鎮痛薬の用法確認	0	0.0	1	3.4	0.483
ベース鎮痛薬の用量確認	0	0.0	0	0.0	—
レスキュー薬の処方追加	0	0.0	0	0.0	—
レスキュー薬の用量確認	0	0.0	0	0.0	—
オピオイド製剤の変更	0	0.0	0	0.0	—
下剤増量・処方追加	0	0.0	0	0.0	—
制吐薬処方追加	0	0.0	0	0.0	—
情報提供のみ	0	0.0	0	0.0	—
その他の疑義照会	0	0.0	1	3.4	0.483

の調剤件数を目標とした調査が望まれる。

医療用麻薬交付時の疑義照会に関しては、講習会受講前は0件で、受講後は1件(3.4%)であった。保険薬局を対象に行われた疑義照会業務に関するアンケート調査では、平均疑義照会発生率が3.3%であることが報告されており<sup>8)</sup>、本調査と同程度であった。本調査では疑義照会発生率に違いはほとんど認められなかったが、調剤件数と疑義照会発生率を考慮すると、講習会受講による効果の評価のためには件数が少なかった可能性が考えられる。

今回の調査の限界として、調査の対象となった保険薬局が少ないことが挙げられる。また、受講者の背景や、初回指導か継続指導かなど服薬指導のタイミングについては詳細に調査していない。しかしながら、アンケートの解析を実施した薬剤師はすべて所属が異なっており、6つの異なる

保険薬局から、受講前31件、受講後29件の服薬指導について、その実態を明らかにできた。また、今回は患者の疼痛や副作用の発現状況を調査しておらず、服薬指導業務の変化が患者の状態にどのような影響を与えたかについては不明である。現在、研修対象の保険薬局を拡大した研修会を計画しており、患者のQOLに及ぼす影響についての調査も併せて検討中である。

今回の調査では、医療用麻薬に関する講習会の受講によって、受講者が保険薬局の医療用麻薬交付時に、疼痛や副作用の発現状況を確認した割合の上昇を認めた。今回の医療用麻薬に関する講習会は、保険薬局の服薬指導業務にも影響を与え、有益であったと考える。一方で、服薬指導業務における指導内容や疑義照会の内容を評価するためには、対象者や調査期間を増やすなど、検討が必要と考える。

利益相反 (COI) : なし.

## 謝 辞

ご多忙の中、アンケート調査にご協力いただきました近隣薬局の薬局薬剤師の皆様へ深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 飛鷹範明, 坪田信三, 古川 清, 他. 保険薬局における緩和ケアの現状とその教育. 日緩和医療誌 2013; 6: 65-70.
- 2) 土井信幸, 鶴田沙織, 清水絵理, 他. 保険薬局薬剤師を対象とした緩和ケアの服薬指導における実態調査と研修実施効果. 日緩和医療誌 2015; 8: 73-81.
- 3) 隅田美紀, 長谷部千夏, 永治正太郎, 他. オピオイド導入時のスムーズな服薬指導を行うための研修効果の検討. 日緩和医療誌 2018; 11: 63-70.

- 4) 山本 亮, 木澤義之, 坂下明大, 他. PEACE 緩和ケア研修会を受講したことによる変化と今後の課題. Palliat. Care Res. 2015; 10: 101-106.
- 5) 寺町ひとみ, 葛谷有美, 加藤 隆, 他. 医療コミュニケーション授業における教材の開発とその評価—動画およびシミュレータの効果—. 医療薬学 2010; 36: 807-816.
- 6) 飯原なおみ, 西尾貴之, 横田ひとみ, 他. 保険薬局において副作用を疑う症例に対応する際の課題. 医薬品情報 2011; 13: 194-198.
- 7) 佐藤宏樹, 三木晶子, 前島和俊, 他. がん化学療法における薬薬連携への取り組みに関する問題点と対応策—ワークショップ開催による KJ 法に基づく問題点の抽出と対応策の立案—. 薬誌 2014; 134: 563-574.
- 8) 十万佐知子, 小西知世, 栗花落美侑, 他. 疑義照会義務と実際業務のあいだに浮上した新たな問題点. 医と薬学 2019; 76: 299-316.

# Evaluation of Improvement in Drug Management by Participation in Palliative Care Workshop for Pharmacists in a Community Pharmacy

Kei MIYANAGA,<sup>\*1,\*2</sup> Junya HASHIZUME,<sup>\*1</sup> Emi RYU,<sup>\*1,\*2</sup> Seiichi NOSE,<sup>\*1</sup>  
Kyoko HASEGAWA,<sup>\*1</sup> Nozomi EZAKI,<sup>\*1</sup> Yuki KAWAUCHI,<sup>\*1</sup>  
Reiko KISHIKAWA,<sup>\*1</sup> Tadahiro NAKAMURA,<sup>\*1</sup> and Yukinobu KODAMA<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Department of Hospital Pharmacy, Nagasaki University Hospital,  
1-7-1, Nagasaki 852-8521, Japan

<sup>\*2</sup> Nagasaki University Palliative Care Center,  
1-7-1, Nagasaki 852-8521, Japan

**Abstract:** In this report, we held a palliative care workshop for pharmacists in a community pharmacy using role plays and small group discussions, and investigated changes in drug management regarding opioids before and after participation in the workshop. After the workshop, the percentage of those who confirmed the analgesic effect and side effects of opioids increased, and the percentage of patients who were educated in how to use the regular administration of opioids also increased compared to before the workshop. The palliative care workshop for pharmacists in a community pharmacy using role plays and small group discussions caused the change in drug management.

**Key words:** opioid, community pharmacy, drug management